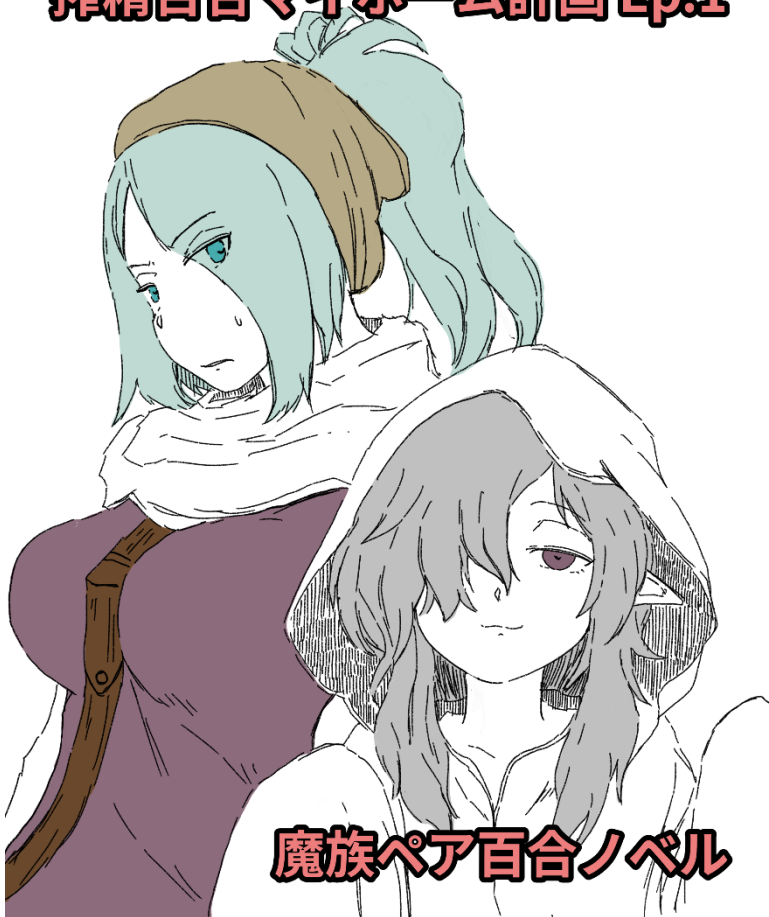


【盗賊討伐編】
サキュバスと触手剣士の
搾精百合マイホーム計画 Ep.1



魔族ペア百合ノベル

プロローグ

第一章 ギルド嬢との交渉

第二章 盗賊団の根城でこんにちは

第三章 いたたまれない達成感

エピローグ

プロローグ

夜気を震わせて昇ってきたのは、どこか弛緩しきった女の吐息だった。
「……あ、そこ……うん、いい。もっと、深くついて……」

砥石を止め、ベルゼ・レヴィアは静かに顔をあげた。

安宿の薄暗い一室。部屋には相棒の姿がない。

本来あるべき黒いローブも、肌身離さず持ち歩く古びた日記帳もない。
(……まったく、懲りないやつだ)

胸の奥をかすめた小さな引っかけかりを、苦い溜息とともに押し流す。

冷えた鋼の刀身を油布で拭い、音を立てずに窓辺へと歩み寄った。木梓に肘をつき、青白い月明かりの差し込む路地裏を見下ろす。

案の定だった。

湿った石畳と崩れかけた木箱。そして腐りかけた酒樽に挟まれた薄暗がり。そこにいるのは、見慣れた華奢な影。

普段はだぼりと身を隠している黒衣を無造作に捲り上げ、小枝のように細い背中を夜気に晒している。大人の男の腕力一つで容易くへし折れてしまいそうな、あまりにも幼く無防備な輪郭。

背後から荒々しく組み敷く男の律動に合わせ、薄い腰が湿った摩擦音を立てて無慈悲に打ち据えられていた。

「……ん、ふ……そう、そこ。……やっというところに、届いた感じ……」
「くっ、生意気言いやがって……いけないなお嬢ちゃん、こんな夜更けの路地裏で、そんな格好して腰振っちゃってよお……っ」

男の浅ましい優越感と荒い鼻息が、メアの細いうなじを犯すように吹きつけられている。

「お嬢ちゃん……ねえ……」

ベルゼは小さくため息をついた。

あの女のどこが『お嬢ちゃん』なものか。

実年齢はとくに人間の寿命をいくつも越え、どれほど甘く啼いてみせようと、その頭のどこかでは常に獲物を値踏みしているサキュバスだといふのに。

冷ややかに毒づきながらも、ベルゼの視線は路地裏で交わる肉の陰影に縫い止められていた。見慣れたはずの相棒の食事風景だ。それなのに、なぜか網膜から焼きついて離れない。

——ず、と。

ベルゼの背中で醜悪に蠢くものがある。

人間世界に紛れて身を潜めているが、メアがサキュバスであると同様にベルゼもまた、忌まわしき深淵の血を引く魔族だ。その証である漆黒の触手が、衣服の隙間からちろちろと鎌首をもたげ、木杵の縁を無意識に削り

取っていく。

相棒が知らぬ男に貫かれている様を見せつけられ、自身の肉体が勝手に熱を帯び、内に潜む怪異の衝動を呼び覚まそうとしている。武人としての高潔さを汚すその下卑た反応に、ベルゼは奥歯を強く噛み締めた。

「あん……はいはい。お説教はいいから、もっと腰、動かして……？　言葉より、そっちのほうがよっぽど雄弁だから……」

「なっ……！」

「……っ、ん……ああ。ほら、口先ばかりで、もう息が上がってる……？　そんな浅い突きじゃ……今夜の空腹、全然埋まらないんだけど……っ、ふう……」

メアが挑発するように唇の端を持ち上げ、腰をうねらせて締め上げている。

絡みつく粘膜が男の最奥を捕らえ、貪るように収縮しているのだろう。肉同士がぶつかり合うたび、夜の静寂に生々しい水音が跳ねた。

「——この、小生意気なメス猫が……っ！　泣いて許しを乞うまで、奥まで叩き込んでやるよ……ッ！」

男が獣のような吐息を漏らし、腰を掴む太い指がメアの白い肌に赤黒く食い込む。

我を忘れた激しい律動が小柄な肢体を揺さぶり、冷たい壁へと無残に打ち据えていく。だが、メアの灰紫色の瞳に浮かぶのは屈服の色などではない。獲物が罠の底へ自ら落ちてきたのを見届ける、捕食者の冷徹な嘲笑だった。

「く……っ、もう……っ、出る……！」

「……うん。ぜんぶ、ちょうだい……残さず、ね」

男の腰が大きく跳ね、限界の吐息とともに最後の一撃が最深部へと突き刺さった。

その瞬間、メアの腰がねつとりと円を描く。窄まる肉の壁が脈打つ剛直を締め上げ、男の命の芯から噴き出す白濁を、最後の一滴まで強制的に吸

い尽くしている。

どぷり、と下品な音を立てて結合が解かれる。

男の足から力が抜け、膝がぐくぐくと笑って壁を滑り落ちかけた。だが、メアはその背中を逃がさない。くるりと身を翻し、崩れ落ちる男の前に膝をついた。

「……もう？ まだ全然、足りないんだけど」

「は……？ お、お前……？」

「まだ出るでしょ？ あんなに威勢良かったんだから」

虚脱と疲労でだらしなく吐き出されたままの男の肉棒へ、メアは迷わず紅い唇を寄せる。

「ちょ、待……もう無理だ、勘弁し……ひいっ!？」

制止の叫びは、濡れた肉擦れの音に呑み込まれた。

果てた直後で過敏になりきった先端を、メアの熱くざらついた舌がねつとりと舐め上げていく。同時に、唇から甘美で暴力的な紫色の魔力が肉棒

へと注ぎ込まれていく。

休むはずだった神経が無理やり引きちぎられるように叩き起こされ、男が声をあげる。へたつていた肉塊が、本人の意思とは無関係に、血管を浮き立たせて猛烈な硬度を取り戻していった。

「な、なんだ……!?　なんで、また……っ」

恐怖に目を見開く男を、メアは長い前髪の隙間から冷たく見据えている。唾液にまみれた唇で先端を押し開き、ためらうことなく根元まで深々と呑み込んだ。

「じゅるるっ、じゅぷ……んぐっ、じゅぼぼっ……!」

喉を鳴らし、狭い咽頭をきゅうとすぼめて扱き立てる。

「ひっ、あぐっ、ああああッ……!!」

「——はい、いただき——」

ずぞっ、と。

鼓膜を直接撫でるような下品極まりない吸引音が夜気に響き渡る。

限界を超えて無理やり引きずり出された白濁が、濃密な奔流となってメアの食道へと直接撃ち込まれた。男の背中が弓なりに跳ね、指先が痙攣している。

メアは喉仏を艶めかしく上下させ、こくん、と静かに嚥下した。

濡れた唇の端を親指の腹で乱暴に拭い、灰紫色の瞳をとろんと細めて、低く呟く。

「……ん。もう少し水分取った方が身体にはいいけど……どろっどろなのも、濃くて好きだなあ」

男の喉から掠れた引きつり声が漏れる。それがどれほど絶望的な宣告か、理解する間すらなかった。

空っぽになったはずの先端へ、メアは再び飢えた口唇を被せ、奥へ、奥へと情け容赦なく吸い込んでいく。

「……おかわり」

「ひ、ぎゃあああッ……!? や、めろ、死ぬ……っ、吸うなあッ!!」

精氣そのものを魂から引きずり出されるような過酷な吸引。

男の肌から急速に血色が失われ、白目を剥いて地面に力なく伸びるまで。夜の底には、泡立つ唾液の音と、冷酷なまでに甘い咀嚼音だけが果てしなく響き続いていく。

ちゆる、と最後にひときわ下品な音を立てて口を離すと、メアは満足げに唇を舐めた。

「……ごちそうさま」

萎びてピクピクと痙攣する肉塊に、メアはそつと両手を合わせる。精を食らい尽くした後の、静かで不気味なほど敬意のある仕草。

男は白目を剥き、泥水の上に転がったままピクリとも動かない。

二階の窓辺で、ベルゼは無意識に手すりを握りしめていた指を解いた。木枠には触手が無意識に穿った浅い傷が刻まれている。自らの身体の奥底に澱む熱を吐き出すように、ベルゼは低く息を吐いた。

「……おい。終わったのか」

声を落とすと、メアが気だるげに視線を上げた。二階の窓辺に立つベルゼを認め、その薄い唇がわずかに緩む。

「うん、終わった。ちゃんと精算もすんだよ」

「精算で言うな……ほら」

ベルゼの背中から、漆黒の触手がするりと一本這い出た。

先端には丁寧に畳まれた白い手拭いが摘ままれている。窓から路地裏までの距離を音もなく滑り降り、メアの鼻先でぴたりと止まった。

「さっさと口拭いて上がってこい、淫乱」

「……ん。ありがと」

メアは手拭いを受け取ると、白濁と唾液にまみれた口元を無造作に拭いながら、足元に転がる男を一瞥した。食べ終えた食器を見るような、冷淡な視線。

「……そいつ、放っておいていいのか？」

「平気。朝には勝手に目を覚ますよ。記憶もちよつと曖昧になってるだろ

うし、こっちの正体もバレない」

ベルゼの目もまた、男の下半身へと向かう。

青白い月明かりに晒されたそれは、先ほどまでの凶暴な膨らみが嘘のように見る影もなく、まるで子供のものののように情けなく小さく縮み上がっていた。

「……おい、そいつのそれ、また勃つのか？」

「え？ 何、ベルも欲しいの？」

「いらん。誰がそんな干からびたものを欲しがるか。そんなに縮んでしまつて、男として使い物になるのかつて話だ」

「さあ？ わかんない」

メアは肩をすくめ、はだけた衣服の裾を直しながら淡々と息を吐いた。それ以上男を気にかけることもなく、こつこつと石畳を踏んで宿の入り口へと歩き出す。

その背中を見送りながら、ベルゼは触手を背中奥底へと引き戻し、深

く息を吐き捨てた。

(……何も言うまい)

生真面目な武人としての矜持と、夜毎見せつけられる淫靡な現実。そして、それを覗き見ながら疼いてしまう自らの忌まわしい異形。

他人に誇れる生き方など最初から選べなかったのだと、ベルゼは苦い思いとともに窓を閉ざした。

階段を上る軽い足音が響き、粗末な木扉が開く。

「ただいま」

「……おかえり」

短いやり取り。

だが、すれ違いざまに部屋の澱んだ空気を切り裂いて届いたのは、夜気でも、安宿のカビ臭さでもなかった。

手拭いで拭った程度では到底消えきらない、他人の男から搾り取ったばかりの生々しい精液の生臭さと、それを溶かしたメア自身の濃密な唾液の

入り混じる、むせ返るような淫靡な匂い。

武人として鋭敏に研ぎ澄まされたベルゼの嗅覚が、その生臭い熱気を容赦なく拾い上げてしまう。

鼻腔の奥を撫でられた瞬間、下腹部が反射のように甘く引き攣り、背中の触手が皮膚の裏側で粟立つように蠢いた。

「相変わらずその触手ちゃんは便利だね、ベル」

「便利ではないのは知っているだろう……？ 常に制御できたらどれだけいいか……」

感情が高ぶれば勝手に噴き出し暴れ出す、忌まわしき深淵の触手。いざという時に制御がきかず、手拭いを渡すといった日常では完璧に操れる己の不甲斐なさ。

武人として正々堂々剣で勝ちたいというのに。

この忌まわしい形状もあって、ベルゼは油布を握りしめて冷えた刃を無駄に強く擦る。

メアはそんな相棒の屈辱などどこ吹く風で、だぼついた黒いローブを翻し、軋む二段ベッドの上段へと身を滑り込ませた。狭い安宿の部屋には、二段ベッドと小さな丸テーブルがひとつあるきりだ。

「そんなに力入れて磨かなくても、誰も奪いに来ないよ……この寂しいお財布もね」

カラン、とメアがベッドの上から投げ落とした薄汚れた革袋が、テーブルの上で間の抜けた音を立てた。中から転がり出たのは、わずか数枚の硬貨だけだ。

「……なあ、メア。路銀は本当にこれだけか？」

「これだけ。今夜の宿代払ったら、明日のごはん分くらいしかないかな。毎度のことだけど」

「……またか」

ベルゼは深く長い溜め息をついて、頭の角を隠すバンドを指先で押し上げた。

人魔大戦が終わって混乱が続いているとはいえ、人間社会の片隅に紛れ込む暮らしは綱渡りそのものだ。

「お前の派手な『お食事』のせいで、同じ宿に三日と泊まれないからな。毎回足がつきそうになっては次の街へ逃げ出す……これでは金など貯まるはずもない」

「私のせいだけ？ ベルだって、いざ戦えば触手で相手を蕩けさせて強制絶頂させちゃうじゃない。街中でやったら一発で『魔族の怪異だ！』って大騒ぎになって自警団に囲まれるよ？」

「ぐっ……！ それは、不可抗力だ……っ！」

「バレたら碌な目に遭わないのは、お互い様。人間たちに捕まって実験台が見世物にされるのはごめんだからね」

痛いところを突かれて言葉に詰まるベルゼ。そっと立ち上がり、ベッドの上にいるメアと視線を合わす。

メアはベッドの上で古びた日記帳を開いていた。ペンの先が、紙の同じ

場所を何度もなぞっている。

そして窓の外。遠い夜空を見つめるその横顔から、ふっと普段の気だるげな皮肉が消えた。

「……そろそろ、ちっちゃくていいからさ。家買つてのんびり住みたいね」
ベルゼの眉が、ぴくりと跳ねた。

おどけた調子ではなく、痛いほど切実な本音が零れ落ちていたからだ。
誰の目にも怯えず、追われもしない、陽の当たる場所にある静かな我が家。魔族である二人にとって、それは途方もなく遠い夢だった。

「……家、か。いいよな……私は、手入れた剣を綺麗に並べる部屋が欲しい」

「私は本棚とー……あとは食事を連れ込む部屋かなあ」

「やめろ……そんな生臭い部屋を作るな。外ですませて来い」

「ええ。雨降った時とか面倒じゃん」

悪びれもせずのたまうサキュバスに、ベルゼは額を押さえて天を仰い

だ。

だが、そんな軽口を叩き合える未来を想像するだけで、胸の奥底がじんわりと温かくなる。

「ま、夢を見るのは自由だけど……お金、いるよね」

「……ああ。金は、要る」

腕を組んだベルゼは、ふと喉元まで出かかった短絡な手段を口にしてしまう。

「……いっそ、魔族らしく人間から力づくで奪えば早いのではないか？」

「あー、それ一番ダメなやつ。強盗なんてやったら一発で手配書回って賞金首だよ。一生追っ手から逃げ回る生活で、どうやってのんびりマイホームに住む気？」

「……そうだな。人間社会の法を敵に回して追われる身になっては、定住など夢のまた夢だ」

ベルゼは傍らの大剣に触れ、無骨な鋼の重みを確かめる。

生き延びるためなら泥を啜る覚悟はあるが、この剣をただの略奪の道具に堕とすことだけは武人の魂が受け付けない。

「となると、結局……」

「ギルドで依頼こなすしかないよね」

二人の声が、呆れるほどぴたりと重なった。

ベルゼの口元に、微かな笑みがこぼれる。正々堂々と剣の腕で依頼を果たし、対価を得る。それこそが、自分にとって最も納得のいく稼ぎ方だった。

「よし。明日の朝一番で冒険者ギルドへ行くぞ。盗賊討伐でも魔獣退治でも、実入りのいい仕事を一発受けてやる。ランクを上げて、資金を稼ぐんだ」

「うん。それで、家を買おう」

パタン、とメアが日記帳を閉じる。

二人で陽の当たる場所に家を買ひ、のんびりと暮らす。その慎ましく切

実な夢が、翌朝の窓口でいきなり理不尽な壁にぶち当たることをこのとき
のベルゼはまだ、知る由もなかった。

第一章 ギルド嬢との交渉

翌朝。

冒険者ギルド「グリムホール支部」の木扉をくぐると、むせ返るような熱気と喧騒がベルゼたちを出迎えた。

吹き抜けのホールは酒場も兼ねており、朝から酒をあおる荒くれ者や、脂の乗った肉料理を突つきながら依頼書を前に額を突き合わせるパーティが入り乱れている。

香ばしい焼き網の匂いと安酒の臭気が混ざり合う中、ベルゼは背負った大剣の重みを確かめ、誇らしげに胸を張った。

「いい活気だな、メア。ここなら腕に見合ったまっとうな仕事がいくらでもあるそうだ」

「……んー、朝からうるさくて頭痛い。もつと静かに稼げるところがいいなあ」

フードを深く被り、眠たげに目を擦る相棒の背中を軽く押し、ベルゼは受付カウンターへと進み出た。

手続きそのものは拍子抜けするほど滞りなく進み、二人の手元には真新しい金属板が渡される。

最下層を示す『Fランク』の冒険者登録証。

「番号四二三番、剣士のベルゼさんと、影術師のメアさんですね。登録完了いたしました」

そう言って書類を整えた受付嬢は、きっちりと襟元を詰めた制服に身を包み、いかにもお堅そうな丸眼鏡を指先で押し上げた。派手な化粧っ気もなく、栗色の髪を後ろで几帳面に束ねた、真面目そうな佇まいの娘だ。

よし、とベルゼは瞳を輝かせ、身を乗り出した。

「早速だが、手頃な討伐依頼を回してもらいたい。盗賊団のねぐら潰しで

も、大型の魔獣でも構わんど。腕には自信がある」

だが、返ってきたのは、事務的で融通の利かなそうな困り顔だった。

「……お気持ちは分かりますが。魔獣や盗賊の本格的な討伐依頼はＣランクからと決まっています。新人さんにお出しできるのは……近場の薬草採取か、下水の害獣駆除くらいですね」

「なっ……薬草むしりだど!？」

ベルゼの表情が露骨に歪む。

家を買うための路銀を稼ぎにきたというのに、それでは今日の宿代どころかパン水代を稼ぐだけで日が暮れてしまう。何より、自慢の剣で薬草の根っこを掘り返すなど、プライドが断じて受け付けなかった。

「そこをなんとか融通してもらえないか？ 実力なら今ここで証明してみせてもいい。頼む、正々堂々稼がせてほしいんだ」

「そう言われましても、規則は規則ですから。何か起きてしまったらギルドの責任問題になりますし……申し訳ありませんが、他の方と同じように

下積みからお願いたします」

受付嬢は頑なに首を横に振るばかりで、取り付く島もない。あまりの杓子定規な対応に、ベルゼが奥歯を噛み締めて頭を抱えかけた、その時だった。

ずっと横から歩み出たメアがカウンターにだらしなく肘をつき、長い前髪の隙間から、値踏みするように受付嬢の顔をじっと見つめた。

そして、わずかに唇の端を持ち上げると、ベルゼの耳元へとひやりと冷たい吐息を寄せてくる。

「……ねえ、ベル」

「なんだメア。規則だと言われてしまつては……」

「あの人、すつごく真面目な顔してるけどさ……だいたい溜め込んでる。少し押せば、簡単に爆発するよ」

「は？ ……な、何の話だ？」

突拍子もない囁きに目を丸くするベルゼに対し、メアは灰紫色の瞳をと

ろんと細め、どこか楽しげに喉を鳴らした。

「まあまあ。三十分くらい、時間ちょうだい」

「おい、メア……」

制止する間もなかった。

メアはカウンターの仕切りをすり抜けるように回り込むと、書類を抱えていた受付嬢の白く細い手首をやんわりと、けれど逃げ場のない力加減で絡め取った。

「え、ちょ、あの……なんですか……？」

「いいから。ちよっとお話しよ。すぐ終わるからさ」

拒絶する暇も与えない手慣れた誘導。

受付嬢は戸惑いながらも、サキュバス特有の甘美な気配に吞まれたのか、されるがままに引っ張られていく。

カチャリと音を立てて扉が閉まり、二人はギルド奥にある打ち合わせ用の個室テーブルへと消えていった。

「おい……」

一人取り残されたベルゼは、扉の奥を見つめたまま、大きく肩を落として深い溜息をついた。

あの獲物を捕らえたメアの瞳。

気だるげな仮面の裏で妖しく揺らめいていた、あの灰紫色の光をもう嫌というほど知っている。

（……あいつ、サキュバスの血が騒ぎやがったな）

お堅い受付嬢の隠された情欲を見抜き、裏取引の道具に仕立て上げるつもりなのだ。

付き合いの長さゆえに、奥の密室で今から何が繰り広げられるのかが嫌でも想像できてしまう。生真面目な武人として止めに入るべきか、それとも現実の路銀のために目を瞑るべきか。

「……深く考えるのはやめておくか」

どうせあの淫魔の手にかかれれば、もうすでに手遅れの時間帯だ。

ベルゼは頭を振って思考を切り替えると、背負った大剣の位置を直し、ホール脇にあるカウンター席へと足早に向かつていった。

「パンとスープを頼む」

「あいよ」

木製の椅子に腰を下ろす。

運ばれてきた簡素な麦パンをちぎり、ぬるい豆スープで喉に流し込みながら、ベルゼは懐の薄い財布の感触を確かめた。

正当な手段で稼ごうと意気込んだ矢先に、相棒が裏で何を繰り広げているのか。考えるだけで胃のあたりが重たくなる。だが、現状を変えるためには他に手は思いつかなかった。

食べ終え、手持ち無沙汰に剣の鞘についた金具を指先でいじりながら待つこと三十分。ギルド奥の重い扉が軋んだ音を立てて開き、メアが一人でふらりと戻ってきた。

その頬は、薄桃色に上気している。

普段の眠たげで気だるい仮面がわずかに緩み、他人の熱をたつぷりとすすり食った後のような、満ち足りた艶っぽさが立ち上っていた。

「お待たせー……あれ？ ご飯食べたの？」

「……ああ。お前が長引きそうだったからな。で、どうだったんだ？」

ベルゼが怪訝そうに眉根を寄せると、メアは「うん」と事も無げに頷いた。

「持ってきたやつた」

ひらりと。

メアがだぼついた黒い袖口から取り出し、指先で軽やかに揺らしてみせたのは、上等なレースの縁取りが施された淡いピンク色の胸当てとショーツだった。

「ぶッ——!?」

ベルゼは口に含んだばかりの冷水を盛大に吹き出した。

咳き込みながら手拭いで口元を乱暴に拭い、血相を変えて立ち上がる。

「な、何を持ってきてるんだお前は……ッ!? 人前で何を晒している!」
「やだな、私のじゃないよ。ギルドのおねーさんのだよ」

「知ってるよ!」

「見てよ、ほら。ちょっとお豆さんをいじっていたら、シューズ履いたまま派手に潮吹きしちゃってさ。まだここ、ぐっしより湿ってて生温かいよ」
「生々しい説明をするな! いいからさっさとしまえ! カウンターの店主もこっちを見てるだろうが!」

ベルゼが青筋を立てて小声で怒鳴りつけると、酒樽を拭いていたスキンヘッドの店主が、慌てて視線を明後日の天井へと泳がせた。

「お、俺は見てねえよ……なんも見てねえ……」

「……見ていなかった男の反応じゃないだろ、それ!」

ベルゼは額を押さえて深々と天を仰いだ。周囲の荒くれ者たちに気づかれなかったことだけが不幸中の幸いだ。

しかし当のサキュバスは恥じ入る素振りすら見せず、濡れた布地を指先

で摘まんだまま、平然と首を傾げる。

「盗賊団の討伐依頼。Cランクのやつと交換しよって約束してきたから」

「……は？」

耳を疑う単語に、ベルゼの思考がピタリと止まる。

「新米のFランクには出せない決まりだったはずだろ。なんでそんな大物を……」

「そのための交渉でしょ」

「……交渉、ね」

ベルゼは訝し気な眼になり、メアの指先で所在なさげに揺れるピンクの布地へと視線を落とした。

「……で？ その、下着を奪われたノーパンのギルド嬢はどうした」

「奥の個室でへたり込んでる。四回も連続でいっちゃったからねー。腰が砕けて、立つのも大変そうだったよ。息を整えてから来るって言ってたから、まあまあ急かさずに待っててあげようよ」

「お前なあ……ッ」

お堅い眼鏡の娘が、薄暗い個室でスカートを捲り上げられ、サキュバスの容赦のない手技に喘ぎ狂わされた光景が嫌でも脳裏をよぎる。四度も絶頂させられて下着を剥ぎ取られるまで鳴かされたのだ。

呆れ果てて言葉を失うベルゼの隙を見逃さず、メアは音もなく身を寄せてきた。

ふわりと鼻腔をくすぐる、微かに汗と甘い蜜の混ざり合った女の匂い。前髪の奥から覗く灰紫色の瞳を艶めかしく細め、メアはベルゼの耳元へ唇を寄せる。

「……あのお姉さんね、最初は泣きそうな顔で拒んでたんだけどさ……」
吐息とともに吹き込まれる、低く甘い悪魔のささやき。

「硬くなってぷっくり勃起したクリトリスの裏側をね、爪先でそっと撫でるように刺激しながら、中の上側を指の腹で円を描くようにぐるぐると擦ってあげたの……そしたらさ、あれだけ恥ずかしがってたのに、我慢でき

なくなつて自分から腰を振っちゃつてさあ……『もつと、そこ擦つてくだ
さいい……っ』つて、指に擦りつけて蜜をぴゅっぴゅつて噴き飛ばしちや
うんだもん」

あまりにも生々しい情景が、鼓膜を伝つて脳裏へ直接焼き付けられる。
一気に頭へ血が上り、ベルゼの白い肌は耳たぶの先まで瞬く間に朱色に
染め上がった。想像するだけで首筋から胸元までが熱く痺れ、背中の奥底
で触手が衝動に震えかけるのを、ベルゼは奥歯を碎けんばかりに噛み締め
て必死に押し殺す。

そんな相棒の無様な動揺を横目で眺め、メアは小さく喉を鳴らして楽し
げに目を細めた。

「ふふ……どうしたの、ベル？ 顔、真つ赤だよ？ ……もしかして、想
像しちやつた？」

「だ、誰がするか……ッ！ 頼むからこれ以上喋るな……っ！」
上ずつた声で顔を背けるベルゼを、メアは灰紫色の瞳でからかうように

見つめ、満足そうにふふつと薄い唇を綻ばせる。

(……もう、気にするだけ無駄だ)

武人としての矜持はズタズタだが、これで路銀を稼ぐ足がかりが手に入ったことだけは確かだった。

「……登録番号四二三番の、ベルゼ様、メア様……」

やがて、微かに上ずった細い声が響いた。

二人が向かうと、そこには先ほどとはまるで別人のようになったギルド嬢の姿があった。

トレードマークだった丸眼鏡は外され、几帳面に結い上げられていた栗色の髪はハラリと乱れて肩口に散らばっている。きつちりと上まで留められていたはずの制服の襟元は微かに着崩れ、汗ばんだ白い首筋には、薄っすらと紅い熱が滲んでいた。

浅く荒い呼吸を繰り返すその瞳は潤みきり、頬を耳の裏まで真っ赤に染め上げている。

荒くれ者ばかりが屯するこの酒場で、そんな無防備な発情顔を晒すのは自殺行為ではないだろうか。ベルゼは思わず眉をひそめたが、元凶が隣の相棒である以上、これ以上深く追求するのは諦めた。

「こ、こちら……盗賊団の討伐依頼書、になります……」

「うん、ありがとー」

メアが気のない返事で羊皮紙を受け取る。すると受付嬢は、涙目で継るように視線を彷徨わせ、消え入りそうな蚊の鳴くような声で言った。

「あの……その、私の……した、ぎ……返してください……っ」

「はい、どうぞ」

メアは至極無造作に、まだ湿り気が残るピンクの布地をカウンターの上へぽんと置く。

受付嬢は悲鳴のような息を呑み、奪い取るようにしてそれを制服のポケットへと押し込んだ。

「……ッ、メアさん！」

「あはは。まあまあ、いい取引だったでしょ？ あんなに気持ちよさそうに啼いてたんだし」

顔から火を吹きそうになりながら口をパクパクとさせるギルド嬢を背に、ベルゼはメアの首根っこを掴むようにしてギルドの扉へと足を速めた。

外へ出ると、朝の澄んだ日差しが照りつけていた。

清々しい顔をしたメアは、だぼついた袖口で小さく伸びをすると、名残惜しそうに舌先で唇をぺろりと舐め上げた。

「いやあ……男の精液も濃くていいけど、真面目な女の子の愛液もすつごく甘くていいね。ごちそうさまでした」

「お前……あまり街中で派手にやらかすなよ？ 魔族だとバレる前に、ただの痴女としてギルドから討伐令が出るぞ」

「えー。ちゃんと依頼書取ってきたんだから、剣士様は褒めてくれてもいいのに」

むくれるサキュバスの横顔に、ベルゼは深い溜息をつきながらも、手元の依頼書を強く握り直した。

手段は最悪だったが、これでマイホーム資金への道はひらけたのだ。

正々堂々と剣を振るうために、ベルゼは背中の大剣を軽く叩き、街道の先へと歩き出した。

街を出発して数日。ベルゼは懷の依頼書を何度も取り出しては、一人静かに気合を入れ直していた。

指先に伝わる羊皮紙のざらついた感触と、背中にずっしりと食い込む大剣の確かな重み。正真正銘の討伐任務だ。

武人として鍛え抜いてきたこの腕前を、ようやく振るうことができるのだと思うと、胸の奥底からチリチリと心地よい熱が湧き上がってくる。

「……盗賊団、か。数は十数名。統率は取れていないが、地の利は向こうにある、と」

「うん。知ってる」

「よし。卑劣な搦め手など使わず、正々堂々剣を交え、実力の差を見せつけてやる」

拳をぐっと握りしめて意気込むベルゼの隣で、メアはだぼついた黒い袖口に口元を埋め、あくびを噛み殺しながら気だるげに歩いている。

「ねえ、それ何回目？ 昨日も似たようなこと言ってた気がするけど」

「な……っ、今日は違う！ 今日……口に出したのは初めてのはずだ！」
「はいはい。本当は二回目だけだね」

あっさりとしらわれ、ベルゼは瞳を吊り上げてむっと唇を尖らせた。せつかくの高揚感に冷や水を浴びせられた格好だが、それでも足取りが

弾んでしまうのを抑えきれない。

「……メアは、緊張しないのか。相手は十数人だぞ。根城に踏み込めば、多勢に無勢の乱戦になるかもしれないのだ」

「別に。危なくなったら震えて怯えていればいいし」

「それで何とかなるのか……？」

「大丈夫。服を引き裂かれて犯されたら、私の勝ちだし」

さりとて恐ろしいことを言い放つサキュバスに、ベルゼは呆れ果てて肩を落とした。

「だからこうして、地味で抵抗しなさそうな格好してるんだよ？ 男の人って、ウブで弱そうな獲物ほど喜んで飛びついてくるからさ」

「お前なあ……！ 相手は血も涙もない凶悪な盗賊だぞ。いきなり問答無用で首を刎ねてくる手合いだっているかもしれないだろう？」

「まあ、その時はその時だよ」

あはは、と気の抜けた笑い声を零しながら、メアは長い前髪の間から

灰紫色の瞳を向けてくる。

「知ってるでしょ？ 私の身体。相手に少しでも精力があれば、干からびるまで吸い尽くして逆転できるから心配ないんだよ」

「……まあ、その無駄に頑丈な淫魔の生態は嫌というほど知っているがな」
「それにさ」

ふいにメアの足取りが緩み、ふわりと風に乗って甘い残り香がベルゼの鼻腔をくすぐった。

「ベルがいるからね。私、全然心配してないよ」

「っ……」

あまりにも屈託なく、絶対の事実であるかのように向けられた信頼。

不意打ちのように胸の芯を突かれ、ベルゼの頬が熱くなった。

この相棒の常識知らずで奔放なところには、いつだって振り回されてばかりだ。けれど、こうして迷いなく背中を預けてくれると、怒る気など綺麗さっぱりなくなってしまう。それどころか、心の奥底がくすぐりたいよ

うな、誇らしいような温もりで満たされていくのだ。

「……そ、そうか。ならいい。私の背後は絶対に死守してやるから、大人しく隠れていろ」

照れ隠しに大剣の柄をぎゅっと握り直しながら、ベルゼはふと思い出したように言葉を継いだ。

「……そうだ、メア。この間の話の続きだが」

「この間？」

「家だ……買うとしたら、どんな家がいい」

先ほどのまでの軽口とは違う、少しだけ真面目な、だけど穏やかな声。

問われたメアの足がわずかにゆっくりになる。

「……ん。そうだねえ……日当たりが良くて、昼までぐっすり寝ていられる部屋があるといいな」

「寝るのに日当たりなど関係あるのか？　むしろ眩しくて邪魔だろう」

「関係大アリだよ。陽だまりがぽかぽかしていると、すっごく気持ちよく二

度寝できるんだもん」

呆れたように首を振るベルゼだったが、ふと相棒の横顔を見て、言葉を呑んだ。

いつもなら半眼で眠たげにしているメアの視線がベルゼではなく、街道の彼方に広がる青く澄み渡った空へと真っ直ぐに向けられていたからだ。追っ手や他人の目を気にせず、ただ穏やかな陽光を浴びて微睡む朝。

口先だけの冗談ではない。まだ見ぬその窓の光を、この長命のサキュバスが心の底から愛おしそうに思い描いているのだと、その瞳の揺らめきが雄弁に物語っていた。

「……そうだな。なら、窓の大きい部屋にしよう」

ベルゼは柔らかく目を細め、静かに頷いた。

「私は、小さな庭も欲しいな。人目を気にせず、朝一番に剣の素振りができる程度の広さがあればいい」

「じゃあ私はその横の縁側で、ハンモックに揺られながら昼寝する係ね」

「働け」

「働いてるよ、今も。こうしてベルの隣を歩いてあげてる」

悪びれもせずに言い切るメアの横顔に、ベルゼは思わず小さく嘖き出してしまった。

魔族としての正体を隠し、泥を吸るように各地を転々としてきた過酷な日々の果てに、こんな他愛もない夢を語り合える相手がいる。それだけで、背負った大剣が羽毛のように軽く思えてくるから不思議だった。

「……ベッドは、二段は嫌だな。安宿のあれは、もううんざりだ」

「狭いよね、あれ。寝返り打ったびにギシギシうるさいし」

「ああ。だから……ベッドを二つ並べて置くか」

「ひとつでいいでしょ。おっきいやつをドカンと置こうよ」

至極平然と言い放たれたその言葉に、ベルゼの足がピタリと止まった。

「ひ、ひとつ……!!? お前、私と一緒に寝る気なのか……!!?」

「え? だって寒い夜とか、ベルを抱き枕にして寝るのあったかくて好き

だし。今更別々に寝る理由ある？」

「だ、だが！ 家を買ったあととなら、部屋くらい分けられるだろう！ 私は寝相が悪いかもしれないし、第一……その、なんだ……」

他人の男を搾り取ったばかりの生臭いメアの身体を間近に感じた夜の記憶や、背中の触手が蠢いてしまう己のみっともない熱狂が脳裏をよぎり、ベルゼは耳の先まで真っ赤にして狼狽した。

そんな純情な剣士の反応を横目で眺め、メアは長い前髪の奥から、意地悪く三日月のように目を細めてみせる。

「……ふふ。ベルってば、耳まで赤くなってる。意識しちゃった？」

「い、意識などしていない……ッ！」

思わず口走りそうになった悪態を飲み込み、ベルゼはゴホンとわざとらしく大きな咳払いで誤魔化した。

「……とにかく！ ベッドの数云々は、金が貯まってからの話だ！ まずは目の前の依頼をこなすのが先決だ」

「はいはい、真面目さん」

むきになって言い返すベルゼに、メアはくすりと艶やかな笑みを零した。からかわれて悔しいはずなのに、その笑い声が心地よく胸に染み渡っていく。

二人は街道を外れ、鬱蒼と生い茂る深い森の獣道へと足を踏み入れている。木々の合間から差し込んでいた暖かな陽光が、頭上を覆う枝葉に遮られ、だんだんと細く頼りないものへと変わっていく。

湿り気を帯びた草いきれと、森の奥から漂う微かな饅えた鉄の臭い。

やがて、木々の隙間の先。崩れかけた外壁に囲まれた、古びた砦の無骨な輪郭が姿を現した。

「……近いな」

「ん。じゃ、行こっか」

ベルゼは背後へ腕を回し、愛剣の柄を力強く握り締めた。

陽だまりのマイホームへと続く、最初の一步。

勝気な碧眼を輝かせながら銀髪の女剣士は迷いなく、盗賊たちの巢食う暗がりへと踏み出していった。